

私と清里

露堂堂と生きる

(1) —故郷はありがたきもの—

私が生きた在日 85 年間には日中戦争、第 2 次世界大戦、日本敗戦による朝鮮解放、そして朝鮮半島に於ける南北戦争、オイルショック、バブル崩壊、阪神淡路大震災、東日本大震災、新型コロナウイルス禍、ウクライナ軍事侵攻、そして能登半島地震等々、暇ない社会変事と自然災禍があった。人生とはこういうものだと、平常心を保ちこれらの変事を潜り抜け生きることが出来たのは幸いであるが、戦争と破壊の現状が日常と思えるのは虚しい。

私を育み、血と肉を作った故郷は生誕地の布施森河内(現東大阪市)より生後移住した秋田県の生保内(現仙北市)。2 歳から 4 歳まで一時住んだ父母の故郷である韓国全羅南道靈岩。秋田工業高校卒業後に埼玉県川口市を故郷にして 65 年になる。

もう一つ大事な故郷がある。21 歳の時にふらりと降り立った浅川巧のふるさと清里(山梨県北杜市)である。

私は秋田工業高校 3 年(1958 年)の時秋田県立図書館で安倍能成著『青丘雑記』を読んだ。そこには浅川巧を「露堂堂」と生きた人と書かれていた、浅川巧との出会いである。そして、その後の清里ライフの基になったのだから縁深い。

植民地支配下にあった、朝鮮に生きて朝鮮の人々から愛された稀有の日本人である。巧の生涯は「人間の価値」が実に人間にあり、それより多くでも少なくでもないことを、その生が示した国際人である。

在日で生きる為の哲学を教えられたのが、浅川巧の生き方である。それは「人間の価値」の一文からである。浅川巧の業績は多くあるが、私の感銘は、その生きる姿、考え方であり、日々の行い、営みである。

浅川巧は、韓国の山河や歴史と文化を大きく深いところで見つめていた。国や民族を乗り越えた「共生」を考えていた人であった。

私の在日生活は 85 年になる。その間、時代は物質文明のみ目覚ましく進み格差社会となった。人々の心の病は深く荒んで嘆かわしい。私達は不幸であった韓日の時代を乗り越え、21 世紀に甦り誠心を込めて友好親善を培い、兄弟であることを忘れてはならないと浅川巧は語りかけている。

私は在日の生を巧のように「露堂堂」と生きたいと念じた。巧のふるさと清里にも住まいを持って生きた 60 年、故郷はありがたきものである。

ある故郷論であります。生まれ育ち一生を故郷で生きた人は一番幸せな人である。生まれた地で生きられず、他の地を故郷にして愛した人は幸いを掴んだ人である。他の地でも生きられず、移り住んだ全ての地を故郷にして愛した人は良く生きた人である。私は良く生きた人であると自認している。

(2) 一露堂堂と光る一

1995 年 11 月 27 日、ソウルで行われた浅川巧没後 64 周年を記念する韓日合同による追慕祭が初めて開かれた。それまで世間の評価から超然としていた浅川巧に光が当たった。

2016 年、戦後 70 年を記念して「朝鮮日報」と国立大韓民国歴史博物館が選定した「韓国を輝かせた世界の 70 人」に、朝鮮半島緑化と白磁の価値創出に努めた浅川巧が選ばれた。

韓国人の中で浅川巧ほど親しまれている日本人はいない。韓国人が感謝し、愛し、信頼し、尊敬されている光であった。

「土に体をつけ暗い夜にも体から光を放ち周囲を明るくするような人」と和田春樹は著している。

「植民地時代に、日本の朝鮮支配の共犯者であるという責任から逃れることが出来る日

本人は只の一人も存在しなかったとするならば、その矛盾を孕んだ生の中にキラリと光るものの正体を見極めることが大切である。」甲府市の備中氏の論評である。

「日本人の朝鮮観の形成に大きな影響を及ぼした思想家の一人に福沢諭吉がいる。彼の脱亜入欧論の鎖の環をなした朝鮮論は、欧米的近代化の遅れた朝鮮は蔑視すべし、処分すべし、というものであった。この福沢の朝鮮論は、形を変えて、今もなお多くの日本人をとらえている。

浅川巧が重要なのは、彼が、欧米と朝鮮とを比較して、欧米が進んでいる、朝鮮が遅れている、というような問題の立て方をしなかった人であるからである。浅川巧のように朝鮮をあるがままにとらえ、なおかつ愛した人は、そう多くない。」と高崎宗司は『浅川巧全集』に著している。

2023年は関東大震災100周年を記念した数多くの行事が韓日両国で開かれた。情報や言論が統制されている時代にもかかわらず、浅川巧は「朝鮮人の放火などを自分は信じていない。一体日本人は朝鮮人に対する理解が乏しすぎる。そんなに朝鮮人が悪い者だと思いついた日本人も随分根性がよくない。よくよく呪われた人間だ。彼らの前に自分は、朝鮮人の弁護をするために行きたい気がする」と官憲を恐れずに著している義人でもあった。

日本人の多くが朝鮮人を蔑視する風潮が強かった時代に、浅川巧はそれとは無縁のところで、朝鮮の民族と文化を理解しようとした。これまで日韓関係がぎくしゃくを繰り返してきた。今こそ、巧の生き方を学ぶ意味があると思う。浅川巧は巨視的に人間・朝鮮人を見つめた人であるからだ。

私達は自省して良い心、広い心、同じ心を通い合わせ心して未来の子らの為、世界の為に寄与貢献する世界の民とならなければならない。

「知の究極は真を観ることである。情の表現は美でなければいけない。意志の理想は善であること。自分の為に生き、人の為に死なねばならない。」という伊藤日出男の人生庭訓から学びたい。

(3) 一誠実の人一

ソウル特別市が管理する京畿道九里市忘憂里公園市民墓地には、日本で学んだ南北分断による不遇の画家大郷・李仲燮(1916年～1956年、享年40歳)が眠っている。李仲燮は韓国美術史で評価が高い現代洋画家である。

墓地には張徳秀、韓龍雲、文一平、呉世昌等韓国独立の近現代史を刻む著名な人士の墓がある。それらの近隣に韓国人に愛慕され守られている日本人・浅川巧の墓がある。

浅川巧(1891年～1931年、享年40歳)は、山梨県北杜市高根町(旧甲村)に生まれた。山梨県立秋田農林学校卒業後、四年余り秋田県大館営林署で農林技師として務めたが、兄伯教と前後して朝鮮に渡る。

農林技師として植林緑化の普及に努める傍ら、失われようとする朝鮮の美の発掘に貢献した。植民地下にあった朝鮮に生き愛された稀有の日本人である。30数年前までは浅川巧の生地山梨県北杜市すら彼の事はあまり知られていなかった。

私は1958年に秋田の高校時代に浅川巧を知った事から、在日として生きる為の人生哲学を学んだ敬愛する日本人である。人間誰でも自分だけの隠し田を持ちたがるものだが、朝鮮人と向き合った浅川巧は隠し田など一切持たなかった。

自分のルーツが高句麗人だと思っていたらしい浅川巧は、高句麗人の血が故郷の朝鮮へと私を呼んでいると、告白した事からも朝鮮への愛の深さがわかる。歴史的に植民地下の難しい時代に、両国の故郷でも受ける苦難を、自分の生涯に代わる愛の対象とした。生きた時代や境涯は違えどもディアスポラである在日二世の私には、理解共感する世界人である。

浅川巧の名著『朝鮮陶磁名考』(1931年刊)の末尾に記した「民衆が目覚めて、自ら生み、自ら育ててゆくところに全ての幸福があると信じる」の文は、その愛の証である。

「今後朝鮮陶磁器の研究は朝鮮研究の発達と共に発達するであらう。しかもその如何なる研究者も今後必一度は、本書の門を潜って教えを受けずには居られないであらう。朝鮮の学徒が故国の文化に眼を開く時、この書の如きは恐らく併合以来日本人のした仕事の中で、最も多くの感謝を期待せれるべき一つであらう。」と安倍能成は称賛している。

朝鮮松の露天理蔵法による種子の発芽、養苗開発など、その業績は光る。朝鮮民族美術館建設の推進、朝鮮陶磁器や工芸の研究、朝鮮の膳などの工芸美を考察、収集し、著書を残した。韓民族の美意識と魂を、民芸と植林の領域で我々の自尊心を高めてくれた。

日本民芸館の創立者柳宗悦(1889年～1961年)は『朝鮮陶磁名考』の序文に「どんな著書も多かれ少なかれ先人の著書に負うものである。だが此著書ぐらい、自分に於いて企てられ、又成された物は少ない」と記している。

柳宗悦は「朝鮮人は日本人を憎んでも浅川巧を愛した」という文を著し、晩年に仏教でいう「妙好人」の言行として遺している。

また「浅川巧さんを惜む」の文で「浅川が死んだ。取り返しのつかない損失である。あんなに朝鮮の事を内から分っていた人を私は他に知らない。ほんとうに朝鮮を愛し朝鮮人を愛した。そうしてほんとうに朝鮮人からも愛されたのである。死が伝えられた時、朝鮮人から献げられた熱情は無類のものであった。棺は進んで申出た人達によってかつがれ、朝鮮の共同墓地に埋葬された。

私とは長い間の交友である。彼がいなかったら朝鮮に対する私の仕事は其半をも成し得なかったであろう。朝鮮民族美術館は彼の努力に負う所が甚大である。そこに蔵される多くの品物は彼の蒐集による。

もっと生きていてくれたら、立派な仕事が沢山なされたであろう。彼程朝鮮の工芸全般に渡って实际的知識を有ってある人はなかつた。私達が計画し合った仕事も多いのである。半にして彼に死に別れた事は、遺憾の極みである。彼のいない朝鮮は、行き所のない朝鮮の様にさえ感じる。」と柳は惜しんでいる。

「柳宗悦らの民芸運動は朝鮮の日常雑器によって開かれた眼を、日本に転じる所から生まれた。日本の民芸運動の誕生の機縁となった結びつきを作った人に柳の友人としての浅川伯教、巧兄弟があつた」と哲学者鶴見俊輔が述べている。

山梨県北杜市出身の江宮隆之著『白磁の人』(1994年刊)の映画化がなされ2011年完成し話題となって十数年となる。

制作過程で両国で紆余曲折はあつたが、浅川巧生誕120年・没後80年節目の記念年

にあたる 2011 年完成上映を見たものである。

つい最近まで韓日両国の若人達や、浅川巧が勤務していたソウルの林業研究院の職員達らも関心が薄く、あまり知られていない存在を憂える人々がいる。この映画上映を通して、両国の青少年達に韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人・浅川巧の時代を振り返り、浅川兄弟の業績を検証し学び合って、未来に福音をもたらす果実を収穫せねばならない。省察を込めながら私はこれらの広がり期待を寄せている。

昨日、巧の母校山梨県立農林学校を 20 数年ぶりに訪問した。我が母校と同じ創立年度であることが判り、20 年前に創立 100 周年を記念して歴史館が建立され、巧のブロンズ像が設置されていた。像の表題に『誠実の人』とあった。母校の偉大さに敬意を抱いた。

(4) 一安倍能成の『青丘雑記』について一

『青丘雑記』は 1932 年に岩波書店より刊行された。収められている随筆は 29 編に及び、追悼文である「浅川巧さんを惜む」と功績を紹介した「浅川君の朝鮮陶磁名考」の 2 編は、感動や感銘では言い表せない文である。

自分より優れたものに対し認め、敬う心、素晴らしき友情の美と魂の真を読み取ることが出来る。

私は墓標に「善盡美盡」と刻んでいる。由縁は『青丘雑記』との出会いによるものである。生前に会ったこともなかった浅川巧の精神に憧れ、敬愛した人生の後仕舞いである。

安倍能成(1883 年－1966 年)は自然主義学派の哲学者でカント哲学研究者として知られる。新制学習院院長となり、没時まで在任、現上皇様の青年期にも講義されていた。

旧制第一高等学校在学中、夏目漱石や波多野精一、高浜虚子らの影響を受けた。岩波書店を起こした同期の岩波茂雄との交流は終生続き、岩波の『哲学叢書』の編集、戦後は平和運動に参画し、岩波書店の『世界』創刊期の代表となり関与した。

1942 年から 1946 年に渡るヨーロッパ留学からの帰国後に、京城帝国大学教授となる。朝鮮の文化を詳細に検討し、日本人の朝鮮人蔑視感情を諫め、戦前の軍国主義に対

する批判、戦後の社会主義に対する過大評価に批判的であった。戦前戦後を通じ一貫したリベラリスト・自由主義者である。

安倍の、『青丘雑記』序文の要旨を述べる。

『本書は大正十五(1926)年二月私が欧羅巴(ヨーロッパ)の見学から帰って朝鮮に赴任して以来、約六年間に渡り、時時の心持ちに任せて響いた雑文を収録したものである。

『青丘雑記』の名は、本書に収めた全ての文章が朝鮮で書かれたことに由来し、青丘は朝鮮の雅名であり、東の国を意味する詞である。

朝鮮に渡来したことは、私の生涯にとっては可なり著しい変動ではあるが、私は概して全ての土地に離れ難い程の愛着を感じないと共に、大抵の土地に美しさと好ましきとを見出すことの出来る人間である上、京城には東京以来の旧知も初めて得た新知もあって、私の私生活には自分自身に対する以外に殆ど不満足は少なかった。

朝鮮の自然も朝鮮の文化も、其自身としては優れたものでないけれども、私は如何なる自然にも、普遍的な又特殊な美しさがあることを知って居るし、又朝鮮の文化は特に日本文化との関連に於て私の興味を引くことが多い。唯現在の内地人と朝鮮人との間には、余りに生々しい幾何かの問題が充ちて居て、それに切入ってゆくことは愉快よりも寧ろ苦痛が多い。

私が朝鮮に来てからの大きな悲は、昨春浅川巧君を先立て、別れたことである。私のこの書によって、私から見て余りにも少ないと思う内地人の関心を、多少とも朝鮮に向け得るならば、それは望外の幸である。』

(5) 一和辻哲郎の『『青丘雑記』を読む』一

日本的な思想と西洋哲学の融合、あるものを、そのものとしては否定しながら、更に高い段階で生かすことを目指した和辻哲郎(1889年-1960年)が、1933年帝国大学新聞に、1932年刊行された安倍能成著の『『青丘雑記』を読む』を載せている。

和辻は倫理学者、文化史家、思想史家、『古都巡礼』や『風土』などの著作で知られる日本の稀有なる哲学者である。

以下は和辻の『『青丘雑記』を読む』の要旨である。

『青丘雑記』は朝鮮、満州、シナの風物記と、数人の故人の追憶記及び友人への消息とから成っている随筆集である。

著者はこの書の序文において、「悠々たる観の世界」を持つことの喜びを語っている。この書はこのような心持ちに貫かれているのである。

人が悠々として観る態度を取り得るのは、人間の争いに驚かない不死身の強さを持つからである。著者はシナの乞食の凶太さの内にさえ、それに類したものを認めている。寒山拾得はその象徴である。(唐末頃、天台山国清寺に住んでいた破衣蓬髪の2人の隠者であるが寒山は文殊菩薩、拾得は普賢菩薩の化身)

(6) —「人間の価値」—

安倍能成は、その著『青丘雑記』(1932年 岩波書店)の中に「浅川巧さんを惜む」を書いたが、これが1934年、中等学校教科書「国語六」そして権域抄(1947年)に「人間の価値」と題して収録され、世の人々に知られる事となった。

「巧さんのやうな、正しい、義務を重んずる、人を畏れずして神のみを畏れる、独立自由な、しかも頭脳が勝れ、鑑賞力に富んだ人は、実に有難い人である。巧さんは官位にも学歴にも権勢にも富貴にもよることなく、その人間の力だけで露堂堂(禅語、何一つかくすことなく堂々とあらわれるさま)と生きぬいていった。かういう人は、よい人といふばかりでなく、えらい人である。かういう人の存在は、人間の生活を頼もしくする。人類にとって、人間の道を正しく勇敢に踏んだ人の喪失ぐらい大きい損失はないからである。」安倍能成をしてかく言わしめた浅川巧は、私の心に普遍の価値として生きてきた。

私の露堂堂の解釈は、良いことをすれば良い結果として現れ、悪いことをすれば悪い結果としてそのまま表れる、である。

「俺は神様に金はためませんと誓った。」と言われたそうである。一種の宗教的安心を得て其自身の為になされてその他の目的の為に、報酬の為になされることを極度に忌まれた様に思ふ。道徳的純潔から来たものであろう。」

弱者を見過ごせない清貧の人、右手で行った善行を左手に知らしめない行事は常に朝鮮の人々の心にとけこもうとする彼の人格がさせたことだ。

「好悪な者、無能な者、怠惰な者、下劣な者の多くははるかに高禄を食み、長を享樂しているが、巧さんのごときは微禄でも卑官でもその人によってその職を尊くする力ある人である。巧さんがこの位置にあってその人間力の尊さと強さを存分に発揮し得たといふことは、人間の価値の商品化される当世に於て、如何に心強いことであろう。私は巧さんの為にも世の為にも寧ろこの事を喜びたい。」

「巧さんの仕事が、種を蒔いて朝鮮の山を青くする仕事で、一粒の種を蒔き一本の木を生ひ立てた方がどんなに有益な仕事か知れない。巧さんは『種蒔く人』であった。」「朝鮮人の生活に親しみ、文化を研究し、大正十二年来、柳宗悦君や伯教(のりたか)君と協力して朝鮮民芸美術館を設けた巧さんの態度は実に無私であった。内地人が朝鮮人を愛することは、内地人を愛するより一層困難である。感傷的な人道主義者も抽象的な自由主義者も、この実際問題の前には直ぐに落第してしまふ。」

「巧さんの生涯はカントのいった様に、人間の価値が実に人間にあり、それより多くでも少なくでもないことを実証した。私は心から人間浅川巧の前に頭を下げる。」

私は人を惜しむ文で、これほど痛切に真情を吐露した友情の言葉を他に知らない。この文章が、戦後になってなぜ教科書から消えてしまったのか。政治や経済が変われば、「人間の価値」そのものまで変わっていくとでもいうのだろうか。価値は変わらないのだが人間が変わり、世の中の都合で変わっただけではないかと思われるがどうであろうか。

今日まで浅川兄弟に敬慕、感謝の心を抱いて在日を生きてきた。私は、どんな時代でも「人間の価値」は変わるものではないと思う。

『著者(安倍能成)は朝鮮の風物を語るに当たって、我を没して風物自身のしみじみとした味を露出させる。しかもこれらの風物は徹頭徹尾著者の人格に滲透せられているのである。

私は没せられつつ、しかも対象として己れを露出して来る。ここに著者の風物記の滋味が存すると思う。

一人旅の心を説くのも、我執に徹することによって我から脱却し、自然に遊ぶ境地に至らんがためであった。

脱我の立場において異境の風物が語られるとき、我々はしばしば驚異すべき観察に接する。人間を取り巻く植物、家、道具、衣服等々の細かな形態が、深い人生の表現としての巨大な意義を、突如として我々に示してくれる。風物記はそのままに人間性の表現の解釈となっている。

著者が故人である浅川巧氏を語るに当たって示した比類なき友情の表現もまた、同様に脱我の立場によって可能にせられている。

特に人を動かすのは浅川巧氏を惜しむ一文であるが、著者はここに驚嘆すべき一人の偉人の姿を、おのずからにして描き出している。

描かれたのは、あくまでもこの敬服すべき山林技師であって著者自身ではない。しかも我々はこの一文において直接に著者自身と語り合う思いがある。

悠々たる観の世界は否定の否定の立場として、自他不二の境に我々を誘い込むのである。「そこより出で来たるその本源の境地に帰る」ことである。』と和辻は書いている。

(7) 一清里銀河塾開塾への思い一

韓国と日本の中学校教科書に唯一紹介されるようになった日本人・浅川巧。しかし今だ両国民に広く知られていない人物である。韓国では功績に反して、いまだ知名度が低く残念である。

しかし浅川兄弟の生き様を通して学ぶと温故知新、韓日の人々が共に学ぶべき今日を生きる普遍なる教えがある。

1991年山梨県北杜市に浅川伯教・巧兄弟資料館が建立された。その前年、旧高根町から作品や資料の寄贈要請があった。

私のコレクションであった人間国宝、柳海剛や池順鐸の青磁・白磁などを含む、韓国民芸品など67点を寄贈した。

その折、寄贈作品を展示するだけに終わらぬ事業に活用して欲しい。資料館は公的博物館としての役目を果たす研究機関でなければならない。様々な分野での先駆者を育てた山梨の風土や歴史、文化を学ぶ「浅川学」の学術研究機関となって社会に還元して欲しい。

市民教育、特に次世代の青少年教育のプログラムを持って、日韓の相互理解、友好親善交流を促進し、国際親善に寄与せねばならないと具申した。

日韓の相互不信を解くには、人と人との生身の触れ合いと心の交流に尽きるとの信念からである。

寄贈後、私ができる事、役立つ事は何かと考え続け、辿り着いたのが私塾清里銀河塾の開設であった。

1961年に初めて八ヶ岳山麓の清里の地に降りた私は、その雄大な自然から神秘を感じ身震いをした。

私塾・清里銀河塾での開会挨拶はいつも、この偉大なる自然の大气から学ぶものがあると強調している。その拘りは、清里に降り立った時の感動とインスピレーションが鮮烈に生きており、持続しているからだ。

私の雅号は「東江」である。ヒマラヤに降った雪や雨が川(水)になって流れて大きな河となる。その河が江となって海に流れ込む。海流は流れ行き、その流れは気流となって空で浄化される。悠久に繰り返される自然の摂理は、ヒマラヤに降り注ぎ循環する。高校卒業の時の寄せ書きに「大河の如く」生きると書き残した。宇宙の摂理に生きる私の哲学を表したものだ。日本(東)の大きな河(江)になろうという在日の気概である。

私は父母の故郷である霊岩の王仁博士廟(王仁博士遺跡趾は全羅南道記念物第20号)に立ち、西に広がる空を仰ぐ。ある時はゆったりと、大陸から寄せ流れて来る雲の動きに見とれる。この大气の流れの先に私が生まれ住む日本列島がある事に感慨を催す。また桜の

季節などは、私が住む川口市にある氏神様の境内の桜のほころびが、王仁廟の桜並木と同時期である事から、桜を愛でる春は日本と韓国の距離を忘れ一衣帯水である事を実感する。

また霊岩の国立公園月出山は「気の山」と呼ばれている。ヒマラヤからの気流がゴビ砂漠、朝鮮半島を南下して月出山に流れ込むからだという。霊岩人は、その気を強く受けているとよく言われる。私にも、その気が流れていると思うのが自然なのだと思う。清里には、その気が充満しております。

(8) ー清里銀河塾から何を学ぶのかー

20代から清里の地で余暇を過ごすようになった。この地域の風土に生まれ人生を送り、間もなく85歳になる。この地に私が憧れ、尊敬する偉人がいたからだ。

この世に人間愛を教え施された、この先賢は在日として生きる私の師であり、人生の指標であった。一人の人間として真実の道を切り拓き歩まれた先賢の足跡は、韓日の風土に息づいており、現代を生きる人の心の根に、日本の風土と韓国の風土を重ねて見えてくるものが、在日にあると思われた。

人を形成するものは「人の真実」であると思う。「人の真実」が誇り高く、求道的であれば風土、人も準じる。しかし人心乱れ、荒廃に任せれば風土、人も墮するのではないだろうか。八ヶ岳の山麓、清里の地域風土の中に生まれた精神、浅川兄弟の生き方から学ぶ事の意義と意味を私は見つけたいと思うようになっていった。

清里銀河塾で何を学ぶのか。学ぶ意味、学ぶ楽しみは生きることそのものであるから、その基本となる「生涯学習」について考えてみた。

一般人(住民)は自分の為に、地域発展貢献のために勉強していこう。職業人は職業意識のレベル向上の為に勉強していこう。生涯健康を保ち、元気に生きていく為に、世代を越えて、心と体を養うために学ぼう。好奇心を持って自分を磨き、生涯成長していきたい、善として生きようとする自分でありたい。その学びの本能は誰にでもあるからだ。

学びが成熟する事で本物の自分を確認し、自分の尊厳を見つける事になる。自分自身

を慈しみ大切にすることは、そこから相手を認める人間関係を作り、人を愛する事に繋がる。そんな人たちが創る成熟した聡明な社会を創っていきたいと思った。

学びあい、助け合い、共に生きることにより、互いを高め合う自己研鑽を積んでいこう。多様な価値観の中で自ら学び、共に学ぶということは自己が決定することであり、生涯学習はつまり自己教育なのである。学びを楽しむ文化を創造していきたい。

(9) 一浅川兄弟に捧げる遺徳の碑—

私は 2006 年より私塾清里銀河塾を 20 回開催した。これまで学んだ塾生は 1000 人を超えている。本日の講演もまた銀河塾での学びの一環であります。

共に学び善き追憶を辿り、先人の徳を慕い回願する事は、相互理解が深まり国際親善の糧となる。

韓国では韓国人に墓が守られ、生誕地山梨県北杜市でも顕彰されるようになった。両国から愛されている人物でありながら、地元の故郷に顕彰碑が建立されていない事を私は長年淋しく思っていた。

ポール・ラッシュ博士は「清里の父」と呼ばれ、顕彰碑も建って敬われ、聖壇にも祀られて久しい。

私は浅川兄弟もいつの日にか、聖壇に祀られる人物であると 1997 年の浅川兄弟を偲ぶ会総会で講演をした事がある。それ以来、いつの日にか石に刻みブロンズ像を配し北杜市に顕彰碑を贈ろうと 20 数年間、構想を温めてきた。

2021 年は浅川巧の生誕 130 周年没後 90 周年記念の年に当たる。6 月 13 日、浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会結成 25 周年を記念して、「捧ぐ敬愛と感謝を込めて」私の座右である「露堂堂」の碑文を添え、兄弟のブロンズレリーフの顕彰碑を生誕地に建立し、叶うことになった。

碑のデザインは五重塔をイメージする五層(五段)。碑石は上野公園の王仁博士碑に倣って下層四段は国産の稲田石を割り肌仕上げ。上層は韓国産谷城石を本磨きにして、彫

刻家・張山裕史氏作の浅川兄弟レリーフを配した。碑文は甲府市の書家・狭山植松永雄氏の揮毫による「露堂堂」である。

安倍能成著「浅川巧さんを惜む」(『青丘雑記』)の文中にある「その人間の力だけで露堂堂と生き抜いて行った」から「露堂堂」の字句を顕彰文に採用し刻んだ。2023年には、北杜市は京畿道抱川郡姉妹都市締結 20 周年を記念し、資料館前広場を庭園化し、私が寄贈した石材で「浅川伯教・巧兄弟記念公園の碑」を建立した。

名実共に聖壇の夢が正夢となった。浅川兄弟の偉徳の賜物である。昨日から今日、今日から明日への尊い継続。「昔植えた苗木大きく育つ。今日植える苗木、未来の大木。」である。韓日友好の絆を結ぶ交流の広場になることをとこしえに祈念する。